

砂漠と草原のモンゴル共和国の旅

ニューヨーク州立大学教授 伊藤 博

首府ウランバートル

北京を出た飛行機はモンゴルの首府ウランバートル上空の悪天候で北京に戻り、翌日やつと待望のモンゴル入りを果しました。空港に降り立ち、出迎えに来ている大勢の人達の中に入るとまず土の匂いがし、あーやっと大自然の中で暮している遊牧民族の国へ来たのだと思いま

した。

出迎えに来ているはずの旅行社のガイドは見当らず、結局日本の海外青年協力隊員で日本語を教えている方と相乗りしてウランバートルの中心地にあるホテルに着きました。元共産主義国のサービス業は大変悪く、例えば一流ホテルのレストランでも一人分のパンにつけるバターにまでそれぞれ別に値段が付いており、食べて

も食べなくても値段が加算されたりします。これも最近迄共産主義の国として知られていたモンゴルの一端だと痛感しました。

ウランバートルの町は工業の中心である事もあって都会の雰囲気は充分あります。(全人口二百十萬、人口の五〇パーセントが町に住み、その四分の一がウランバートルに住んでいます)特に年一度のお祭の時期でもあったので活気に溢れていきました。

七月十一日は遊牧民の日に当たり、三日間お祭があり、各地で遊牧民が集まり御馳走を食べ競馬や相撲を競います。地方で勝ち残った者がウランバートルの中央国立競技場でナショナルチャンピオンシップを競います。勝者は英雄としてもてはやされます。伝統的舞の他、競馬・弓道・相撲どれを取つても大平原を馬で駆けめぐり弓や鷹で狩をし、素朴なスポーツとして草相撲が発達した事が実感を持つて感じられます。

七月中旬に二日間祝日が続き國中がお祭ムードになります。相撲は芝の國立競技場でいく組も力士がお互い競い合い、日本の相撲とレスリングを組み合せた様な物で土俵は無く相手を倒す迄闘い、その前後の儀式は日本の相撲の様に様式化されたかなり複雑な物です。弓道で面白いと思ったのは、一列に並んだ弓士が百メートル程離れた的を目^ミがけて弓を射るわけですが、的は五センチ位の草で編んだ物で地面に置いてあります。そのすぐ後に多数の男女の審判員が並び的に当ると歌を唱いながら両手を高く上げて射手に合図するという事です。驚いた事には矢が飛んで来るにも拘らず、数十人の審判員は巧みに身を交わし歌を唱い続いている事です。一番爽快なのはやはり大平原に展開される競馬でした。特に子供の騎手が自由自在に馬を駆け巡らす風景は西部劇その物で、しかもいかに馬が生活に密着しているかを実感しました。緑の

平原に点在する白いパオはとても印象的で、その脇を駆け巡る騎手は昔のジンギスカンやクビライカンを想像させます。

活気に溢れている様でもその根底を見ると政治経済全てを依存していたソ連の崩壊と統制経済から自由経済市場への移行は物質身心共に多くの混乱を招いている事はすぐ解ります。店の商品、特に国産品は乏しく街角の商店では中国とかシンガポール等の外国製品が多いのが目に付きます。一九九〇年の無血の民主化革命、そして一九九二年二月の新憲法公布は僅か三百人足らずの青年の新しい国造りとして始まったわけです。しかし七十年以上続いた社会主義体制の余波はあまりにも大きく、経済不振の他価値観の急激な変化で社会が混乱しているのが解ります。

ゴビ砂漠の遊牧民

モンゴルと言えばアフリカのサハラ砂漠と並んで有名なゴビの砂漠が中国との国境にあります。ロシア共和国との間には長さ八百キロもあり一番深い所では千六百メートルもあるバイカル湖があります。その水量は世界の淡水の二〇パーセントも占めており、この湖の四五パーセントがモンゴル側にあります。モンゴルの気候は全体に大陸型で冬は厳しく夏は蒸し暑いですが、アルタイ山脈を西に背負う森林と草原地帯は放牧に適しております。

我々は先ず南ゴビ迄飛びました。純粹の砂丘は僅か全体の三パーセントにすぎず、空から見る砂漠のほとんどは雑草が生えている土漠で、日本人がイメージとして持っている砂漠とはほど遠い物でした。但し砂漠特有の動植物があり、更に印象的だったのは至る所にラクダと羊が放

牧されている事でした。ゴビの砂漠でガイドと車の運転手と一緒に砂漠に点在するパオ三カ所に寄りました。パオは放牧民特有の住居で木で枠組を造り、羊毛のフェルトでその上を包み込み、最後に白いキャンバスでカバーがしてあります。中には中央にストーブがあり、廻りにベッドや椅子等家財道具が全て置いてあります。昔は父系大家族主義でしたが、十九世紀になり家系より役職が重要視される様になり現代のモンゴル人はほとんど家系は解らないそうです。家族構成も夫婦と子供単位で夏は白い折りたたみ式のパオに寝起きして絶えず牧草を求めて移動しますが、冬は厳しく一定の場所に家畜小屋を作つてその廻りで数家族が生活します。面白い事には一番若い男の子が両親の家畜を引き継ぎ、長男・次男は平等な分前としての家畜をもらつた上、独立分家する習わしだそうです。女の子は嫁に出すそうです。

モンゴル人の名前には姓がありません。私達の知人でワシントン・モンゴル大使館駐在の外交官はダルジャビン・サンダグと言いますがサンダグは彼の名字ではなくて彼の父親の名前です。ダルジャビンは彼が生れた時もらった名前で、彼の子供は生れた時の名前の後にダルジャビンと付きます。次に孫の名前にはもはやダルジャビンというのは付きません。従つて我々の知人のサンダグはミスターサンダグでもなく、ミスター・ダルジャビンでもなく、ただサンダグと呼びすてにする習わしです。サンダグという名前が二代以上続く事はないわけです。名前に関する限り先祖崇拜がない様に思えますし、又遊牧民族ですので一カ所に家族のお墓を維持する習慣もない様ですが、昔は先祖崇拜の習慣がありました。

我々もパオに一泊しましたが居心地はなかなか良いでした。ガイドも運転手も一面識も無い

家族を訪れ、話に聞いていたモンゴルで一番有名な飲物である馬乳を一度試してみたいと思つていたのでガイドを通じて頼むと、白い少し発酵したミルク状の飲物と、馬乳やラクダの乳から作ったチーズを御馳走してくれました。ヨーグルトのような味のする馬乳の他に羊の肉も一緒に出してくれる家族もありました。突然見知らぬ家に行くのですが、ほとんど用件を言わなくとも客を接待するという習慣は砂漠の遊牧民族の共通点だそうです。その背景には厳しい砂漠の中で旅人をお互いに助け合うという必要性から来てています。半ば当然のように食物を出してくれるし、お礼をする習慣も無いらしくこちらの感謝の気持ちで出すプレゼントに対してもありがとうと言う習慣も無い様です。ガイドに聞くと相手もお礼の品をもらう事は期待していないし、又上げる習慣もないと聞き驚きました。但しこの様な見知らぬ旅人を接待する習慣もだ



んだん薄れてきていると後で聞き少し淋しい気持でした。

共産主義経済の崩壊と共に失業が増え労働人口の一五パーセントに当る十五万人が失業していると言われています。

又統制経済から価格自由化に移行した結果激しいインフレにも見舞われ一説には年間一五パーセントも上がっているそうです。その結果都会の住民はほとんどがアパート住いですが、特にサラリーマンや高令年金者は日用品も買えず困っています。貧富の差が激しくなった結果、特に犯罪が増え、その深刻さは社会問題になつております。社会主义政権の下では元のソ連のように治安の良さを誇っていたモンゴルでしたが、最近では犯罪率は年間二〇パーセント以上上がつていると聞いております。今迄はドアに鍵をかける必要がなかった市民も最近は物騒だから気をつけるようにと言わ正在するそです。事実我々と一緒に

行つた女性の旅行者もウランバートルの町中でいやがらせをされたと言つていました。

カラコルム遺跡へ

次にウランバートルから西に四百二十キロ程離れた所にあるモンゴル大帝国が築いたカラコルムの遺跡にガイドと一緒にジープで出かけました。飛行機で行くはゞでしたが燃料不足で空と陸の定期便は出ておらず、急拠ジープに変更したわけです。全国土の八五パーセントを占める遊牧地帯を走つて見る広大な草原とその中に点在する真白なパオはとても印象的でした。但しガイドも運転手も一回も行つた事がないらしく遊牧地帯を迷い続け野宿をするはめになり、ジープの中で寒い一夜を明かせねばならず閉口しました。この様な事は頻繁にあるらしく他の日本人旅行者も同じ様な体験をしたと言つておりました。この事でも解る様に運送に限らず通

信、情報網及び教育全般にわたり深刻な問題を抱えています。

先ずモンゴルの最大の産業は牧畜産業ですが、その形態が根本的に変わった事が原因とされております。統制経済の下では協同組合で羊、ラクダ、牛、馬等別々に分担して管理していたのが、自由化になり個人に分配されてからは飼育の方法も異なるこれ等の家畜と一緒に飼わざるをえない様になりました。その結果飼育人不足が生じており、その皺寄せが子供にかかり二〇パーセントもの子供が学校に行けなくなっていると聞きます。それというのも今迄の無料教育が無くなり教育に金がかかる様になつた為もあります。家畜の私有化が為されてもそれを売買し運搬する流通機構が悪くなり、結局家畜がいても現金化する方法が無くなつてゐるからです。品不足やインフレで高騰している日常必需品を購入し、税金を支払うのが精一杯で子供の教育

費に迄は手が回らないのが現状の様です。その上教育してもインフラが崩壊している現状では就職も覚束ないと聞いては子供を学校に行かせたくない遊牧民がいても不思議ではありません。

共産主義時代はラジオや新聞が遊牧民の間に浸透しておりました。遊牧生活様式にも拘らずほぼ一〇〇パーセントの識字率を誇つております。それが情報網の衰退により日常生活にもかなりの悪影響を及ぼしております。我々はパオで馬乳を御馳走になつた御礼にラジオの電池を置いてきましたが、後で電池不足でラジオも聞けないと聞き一役立てばと思いました。

燃料不足の他に原料不足が国内生産の減少を招いております。羊毛や牛皮は主に輸出に廻され国内生産用の化工原料が不足するという悪循環を生んでおります。

カラコルムは十三世紀のモンゴル大帝国の古都で今は遺跡らしい物は何もなく、ただ大平原



の広さが昔を偲ばせるだけでした。ジンギスカンの埋葬の地は科学調査で推定されているそうです。人工衛星からの空中写真と地質調査によると昔広大な土地を掘り起し色々な物を埋葬した形跡があります。但しモンゴル政府は発掘を禁止しております。その近くにある一五八六年に建つたモンゴル最古のエルデンズー僧院は圧巻でした。四方高い壁に囲まれた大きな敷地です。しかしその大部分は過去七十年余年の共産化の過程に於て破壊され、今はその一部しか残つております。敷地の一番奥に今でも使つている僧堂と、今は影も形も無い本堂を取り巻くいくつかの寺院が残つてゐるだけです。ただそれ等のひとつひとつが建築的にも美術的にも色彩豊かですばらしくモンゴルの青空を背景にくつきりと浮かび上がつてゐる姿を見た時、やはり苦労してもここ迄来た価値があつたと思いました。

カラコルムに行く途中迷つたお蔭で予定していなかつたラマ教の寺院を拝観する事ができました。その僧院も壁に囲まれ、その一角に大きくもない釈迦堂があります。その内側は礼拝者が歩けるだけの通路があり、建物のほとんどの部分がラマ僧の座る場所で何人の老若の僧侶が中でお経を唱えていました。その回りをお布施を置きながら参拝して廻ります。部屋は薄暗くお勤めの時以外は全体が締ります。エルデンズーのような豪華さはありませんが、地元の遊牧民の集落に密着し毎日使われてゐる素朴な雰囲気でした。

ラマ教

モンゴルにはモンゴル人の他にロシア人、中国人、カザツク人等の少数民族がおり、仏教の他にもイスラム教やシヤーマン教があります。モンゴルに仏教が伝来する以前は自然宗教とし

てモンゴル民族は青空を崇拜し、呪い師や祈禱師を通じて無数の精靈を祭り、先祖崇拜の習慣もありました。モンゴルの最大の宗教であるラマ教は政治と切り離せない密接な関係にあります。中央アジアに位置し、ロシアと中国と国境を接しているモンゴルは国の独立維持にいつも主力を置いていました。ジンギスカンの下でモンゴルは十三世紀には黄河から黒海まで一大帝国を築き、それが百五十年余り続いた事は良く知られていますが、その後内乱や外圧に屈し、一九六一年に満洲の清朝に征服され、一九一一年迄自治を失つておりました。一九一一年に外蒙古だけが独立しましたが、又八年後には中国に屈しやつと一九二一年にロシアの手助けで独立を勝ち取りました。しかし一九二四年にはそのロシアをも追い出し完全な独立国になりました。こういう状況もあってラマ教は政治の一助として導入されました。

仏教の伝来は日本よりも遙かに遅く、一五七八年にモンゴルの將軍アルタンカンがチベットの黄派の高僧をモンゴルに招いた時に始まります。その動機はジンギスカンのようにモンゴルを再統一し、清朝のような外敵から守る為、仏教を利用しようとした事です。意図的に中国のような大乗仏教でなくラマ教を選んだのもその為です。アルタンカンは自己の権力を仏教に正当化してもらい、その代り仏教を手厚く保護しました。ダライラマの称号はアルタンカンが最初のチベットからの高僧に与えた時に始まり、それ以後も後継者がその称号を受け継いできております。

ラマ教は十七世紀に入りモンゴル全土に広がり貴族と一般大衆に支えられ、ラマ教の僧院は遊牧民の集まる所には至る所に建てられました。モンゴルのラマ教は原始宗教の儀式や機能を受け継ぎ、更にマハヤナ派の要素とヒンズー教の

一種で密呪、密教的要素も兼ね備えています。つまり魂の救済と厄払いの為の儀式と仏教本来の悟りと生れ代りをその教えの中心としております。特に黄派は僧院に入り、仏典の理論と形式を重んじます。僧侶はモンゴル社会で重要な政治的役割を果していました。

黄派の説によれば為政者は仏の道を悟った僧の変身であり、宗教と国家の相互依存を強調しました。

二十世紀に入り五八三の僧院が建ち国

の富の一〇パーセントを支配しました。都市は僧院のある集落にでき、ウランバートルはダライラマの次に位の高いボグドカンという位の高僧の住む所として発達しました。僧院は富と信者を増やしたモンゴル貴族の衰退と反比例して権力を増やしました。一九一一年に清の支配が終つた時は僧院が唯一の統治機構を為し、一九二〇年代には全人口の三分の一が僧院僧侶の管轄下にありました。

共産主義と人民革命党の台頭により一九二一年以降は仏教は弾圧の対象となり僧院は閉鎖され、僧侶は要職を解雇され、僧院の財産は没収されました。特に一九三八年ソ連はモンゴル仏教徒が日本軍と共謀して傀儡政権を建てようとしていると信じ、僧院の破壊と僧侶の追放に没頭しました。しかしその反面近代化と社会改革が共産党の下で押し進められました。

一九七〇年代の初めから人民革命党はもはや僧院は政府に对抗する力を持たないと見て、又モンゴルの文化や伝統、それにアイデンティティーを培う手段としてラマ教の復興を手がけ始めました。ウランバートルのガンダン寺だけが開放され現在一〇〇人位の僧侶が住んでいます。老僧は薬草等の伝統医学に関するチベット語の翻訳に携わされました。他に二・二の僧院が博物館として観光客に開放されています。

仏教の復興

仏教の復興は一九九〇年の民主化運動以後も着実に進んでいます。それ以前でも一九七九年と八二年にはダライラマも訪問しました。更にウランバートルでアジア平和仏教会議が開かれ、日本、ベトナム、カンボジヤ、スリランカ、ブータンが参加しました。仏教は主に年寄の中に生き延び、年々若い僧侶の姿も増えております。人々の言葉の中にも仏教のことばや格言が多く使われ家の祭壇には仏像の絵が飾つてあります。ガンダン寺の一角にある修道寺には元ソ連邦から来ているという留学僧もいれば、地元の幼い子供が黄色の袈裟を着て親に連れられて勉強に来ている微笑ましい姿もありました。

たまたまそこで出会った女性は近くの女性だけの仏教学校をパオで開いている人で、この人の道案内でのパオに入り十人位の女性の集会

を参観しました。その日はアメリカから來たという若いお坊さんの話を聞く為に集つたそうで、その方の話では海外のラマ僧が説法や教えに来る事があるそうです。ところでこの学校は家庭暴力の犠牲者の女性の駆け込み寺になつております。モンゴル社会で僧院が社会問題の受け皿になりつつあると感じました。特に共産主義時代以前の僧権政治の時代は外国人から見てモンゴルの僧侶は無知無力で退廃しているというのが一般的な見解でしたが、一般のモンゴル人にとって僧侶は人間性の弱さを持つても制度としての僧院の不変化を信じていました。従つて今日昔の仏教の様に形式化せず、政争に巻き込まれず、一般庶民から遊離せず、仏教本来の信者を中心とした姿に戻る絶好の機会だと感じました。